
異世界聖魔譚

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界聖魔譚

【Nコード】

N3486Q

【作者名】

紅このは

【あらすじ】

幼い頃から教えていない言語を理解し、自由に扱う少女、梨緒。彼女は家でも学校でも孤立し、唯一の味方は妹である由希だけだった。

梨緒は地球は自分の居場所ではないのだと理解していた。

そして、突然現れたブラックホールのような穴。迎えが来たのだと悟り、躊躇いもせず中へ入る。

目の前には目がくらむほどの美形が五人。

「この日をお待ちしておりました。我らが魔王よ」

ブラックホールに向かって歩き出した姉を止めようとした由希は次の瞬間、見覚えのない場所に立っていた。

混乱する由希に、爆弾が投下される。

「魔王を倒してください、勇者殿！」

人間と魔族が敵対する世界、リアンデールへ召喚された二人の姉妹。

魔王の魂を持つ姉。

勇者に祭り上げられた妹。

敵となった仲の良い姉妹は何を思い、何を選択するのか。

「神の箱庭」シリーズ第四作目。世界観が違うので一作目の「レィゼの神」や二作目の「はちみつ色の姫」や三作目の「エルレンド王国記」を読まなくてもわかると思います。R15は保険です。

登場人物（前書き）

随時更新予定。

登場人物

〈魔族サイド〉

梨緒^{りお} 十八歳

主人公。由希の姉。幼い頃から古代語の歌を歌い、リアンデールの言語を理解していた。魔族の女王、つまり魔王になる。

ルシファー 不明

腹黒い美青年。白い髪に赤の目。

サマエル 不明

盲目。割と世話好き。白い髪。目はいつも閉じている。

アスタロト 不明

人懐っこい。魔物と友達。黄みがかった銀髪に緑の目。

ベリアル 不明

我関せずな青年。銀の髪に青い目。

サタナエル 不明

病弱。白い髪に金の目。

く人間サイドく

由希^{ゆき} 十六歳

主人公。梨緒の妹。明るく、人を引き付ける才能を持つ。梨緒が異世界に来る際、一緒にいたためについて来てしまった。勇者に祭り上げられる。

ラフォード 二十二歳

サンハイド王国の第二王子。金髪碧眼。

ディレン 二十三歳

ラフォードの側近。紺の髪に金の目。

モルテ 十九歳

由希の身の回りの世話をする侍女。桜色の髪に焦げ茶色の目。

アザン 不明

優秀な魔術師。藤色の髪に赤と金のオッドアイ。左目にモノクルを付けている。

ブログ 『姉妹』（前書き）

誤字脱字の発見があれば連絡お願いします。
感想也大歓迎です。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

プロローグ 『姉妹』

梨緒は変わった子供だった。

彼女が口ずさむ歌は全く聞き覚えのない言語で、日本語以外の言葉を知らないはずの子供にはあり得ない事だった。

それだけなら、子供が自分で作った歌なのだと無理矢理納得する事もできる。

だが、ふとした拍子に書く文字らしきものはちゃんとした規則があるらしく、どこかの言語であると一目でわかるものだった。

それをまだ五歳であった梨緒が考えたとは到底思えず、しかしなぜ教えてもない言葉がわかるのかという疑問は解明される事がなかった。

当然というべきか、梨緒は学校でも家族でも孤立していった。

いじめは受けなかったが、誰もが気味悪がって近寄ろうとすらしなかったのだ。

梨緒の家は古くから続く由緒ある家柄だったので、両親は梨緒の力が外に漏れる事を嫌い、学校以外で家の外に出る事ができないようにした。

そんな中で、梨緒の唯一の理解者だったのが由希^{ゆき}。梨緒の二歳違いの妹である。

由希は梨緒とは対照的に、異性にも同性にも人気のある明るい子供だった。

彼女が一番に求めるのは梨緒で、梨緒は申し訳ないように思う事がよくあった。

なぜなら、梨緒には行くべき場所があるのだから。

由希の事は好きだ。でも、それとこれとは違う。

今のところは勘でしかないが、自分の勘が当たる事は梨緒自身が一番よく知っている。

そして、その勘は日増しに強くなっていった。

「梨緒、また本読んでるの？」

呆れたような声に、梨緒は視線を上げた。

「電気も付けずに読んでたら目、悪くなるよ」

そう言われて、梨緒は目を瞬いた。

「いつの間に……」

どうやら本に夢中で気付かなかったようである。

「母さん達、今日帰って来れそうにないってさ。全く、自分で言え
っの」

娘（片方だけだが）の携帯の番号も知らないのだから仕方がない。

「……わかった」

梨緒は暗くなり始めた外を見て本を閉じ、台所へ向かった。

基本、梨緒は何でもこなす。

文武両道で勉強面にも運動面にも才能を持ち、しかもほぼ家に監禁状態であつたためにそれらを磨く時間は十分にあつた。

おまけに両親が仕事でほとんど家におらず、由希は不器用な人間である。梨緒が家事をやるのは自然な事だった。

また、知的好奇心が旺盛で記憶力が良く、本好きの梨緒は雑学もたくさん頭に詰め込んでいて、由希などは一度頭の中を見てみたいと思うほどだ。

そんな訳で、いつもご飯を作るのは梨緒の仕事。

「今日は何にするの？……あ、言わないで。当てるから」

聞いた癖にすぐ否定してほしくないなあ、と思いつつ質問に答えようとした口を閉じる。冷蔵庫から野菜を取り出し、手際良く刻んでいった。

由希はしばらくああでもないこうでもないと言っていたが、不意にその声が途切れた。

「……………梨緒、あれ」

長い沈黙の後、由希が小さく言った。

「ん？」

丁度切り終わったところだった梨緒は、由希の掠れた声に何事かと振り向く。

そこには、黒いブラックホールのようなものがあつた。

大きさは二メートルほどだろうか。ブラックホールに似ているが、何でもかんでも吸い込むわけではないらしい。

ただそこにあつて、待っているだけ。

梨緒は包丁を置くと、迷わず歩みを進めた。

「梨緒？」

由希が怪訝そうに言うが、梨緒には聞こえていない。

梨緒は直感していた。

呼ばれているのだと。

自分の居場所はあの先にあるのだと。

だから、自分からそのブラックホールの中へ入っていった。

ブローグ 『姉妹』（後書き）

次回から悪魔サイドと人間サイドに分かれます。
また、時折閑話や神様側の話も混じります。

● 01 ● 『異世界へ』 (修正&増量) (前書き)

梨緒視点です。

● 01 ● 『異世界へ』（修正&増量）

自分で言うのも何だけど、私は気味の悪い子供だったと思う。

教わってもない言語を話し、書き、歌う。話すのと歌うのは別の言葉であるようだが、そんな事は問題じゃない。

両親が気味悪がって私を閉じ込め、世間の目に触れないようにしたのは不幸中の幸いだったかもしれない。

表沙汰になっ たらまず間違いなく研究とかされるだろうから。

まあ、それでもどこから漏れたのか、誘拐犯はうじゃうじゃ出てきたが。

もしかすると言語の事ではなく、なぜか桁外れに良い勉強とか運動の成績の事や身代金目当てだったのかもしれない。

警察を呼ぶような事になる前に自分で対処していたから、今となつては知りようがない事だ。

私の家は旧家であつた。

そして、現在は父だけでなく母も働いて、それなりに大きい会社を経営している。

私の存在は邪魔でしかない。

……ただし、言語の事を除けば両親を満足させるに値する娘だったようで、パーティーなどにはよく連れ出された。

私が外出するのは学校とパーティーの時だけで、後はもっぱら家で読書か勉強だった。

妹の由希は愛されているけど、私はただの道具。

そんな感じだった。

由希はよくできた子で、私とは正反対の眩しい存在だ。

確かに、勉強面ではあまり優秀とは言えないかもしれない。しかし、私にはないものを持っている。

本人が気付いているかはわからないが。

私は、私を慕ってくれる由希が好きだ。

……本当に？

最初に私の目に飛び込んできたのは、こちらをじいっと見てくる美形の集団だった。

しかも、なぜか全員男。

十代後半から二十代くらいの。

一番手前にいるのは白い髪に赤い目をした青年だ。髪は長く、腰辺りまであって腰の少し上を一つにくくっている。……あまり意味がないように思うのは私だけでしょうか。

その隣は黄みがかった銀髪に緑の瞳。銀髪というよりはプラチナブロンドだろうか。年は私よりも少し上くらいだ。ただ、好奇心いっぱいの顔は幾分幼く見えなくもない。

後ろの壁際にも二人の青年がいる。

一人は白髪で一番近くにいる青年と同じくらいの長さだが、くくってはいないようだ。瞳の色はまぶたが閉じられているため、わからない。

もう一人は銀髪に青い目。無表情で腕組みをしていて、まるで自分とは部外者です、みたいな顔をしている。髪の長さは短めで、さっぱりとしていた。

「この日をお待ちしておりました。我らが魔王よ」

………はい？

「マ、オウ……？」

「ええ、あなた様こそが、我らの王」

赤い目の青年が言った言葉に、私の頭は危うくフリーズするところだった。

魔王？

何そのベタな展開。

「………詳しく話を聞いても？」

「もちろんかまいません」

「水球に入っていたくのが一番手っ取り早いんですけどね」

「水球？」

そんなものに入ったら窒息死するだろう。……いや、異世界なら何でもアリかもしれない。

そう、ここは異世界だ。

地球に赤い目の人がいるわけがない。詳しくは覚えてないけど、遺伝子上の問題か何かで、赤だけは絶対にありえないとか。

まあ、そうでなくとも状況を考えれば誰でもわかる。

私の下には薄く発光する魔方陣。先程の魔王発言。

ここが異世界でなくてどこである？

「とりあえず、名前を覚えていただいてもよろしいですか？私は梨緒といいます」

両親に連れて行かれたパーティーでの社交界スキルを活用して言う、赤目の人が一番に口を開いた。

「私はルシファーと申します。陛下、私達に敬語は不要ですよ」

「わかった」

そりゃそうか。なら、愛想笑いもいらなかな。疲れるし。

「オレはアスタロトです。あっちの無愛想なのがベリアル、その隣がサマエル」

それからアスタロトは、サマエルの目が見えない事を教えてくれた。だから目を閉じていたようだ。

「それで水球……とかいうのに入れば手っ取り早いっていうのは？」

「水球は人間にはないものなので説明するのが難しいのですが、成

人した魔族が必ず入るものです。魔王様の場合は中へ入る事によって魔族の体が変わります。代々魔王様にはその中に入っていたいて“生まれ変わる”儀式をするのですが、入ってくださいと言って入ってくださる方はおらず……」

まあ、当然と言えば当然だろう。

「普通は入りたがらないと思うけど」

心底わからないという顔をしているルシファーとアスタロトに苦笑して言った。

要は環境の違いだ。魔族がどうかは知らないが人間は水の中で息なんかできないし、誰だつて怖いに決まっている。大体、いきなり召喚されて魔王と呼ばれ、水球に入れなんて言われても従えるわけはないだろう。

でもまあ……

「だけど、入ってもいい」

私が言うと、彼らは少し驚いた顔をした。それから嬉しそうに笑う。

「そうですか。では、こちらへ。ご案内します」

連れて来られたのはかなり広い部屋だった。先ほどの部屋のように薄暗く、窓などは一切ない。当然、カーテンもだ。廊下も同じで、きれいな緑色に光る苔以外に電気やそれに代わるものは一つもない。足元が見えず、正直歩きづらかった。

部屋には直径二メートルくらいの玉が六つ並んでいた。どういう仕掛けなのか、絨毯から数センチ浮いている。

「これが？」

「はい。私達はただ“水球”と呼んでいます」

水でできた玉はガラスなどに入っているわけではなく、つつくとき指を通した。濡れている感じはするのに、手を出しても水はついていない。

「中で息はできる？」

不思議に思いつつ、念のために聞いた。魔族は水の中でも平気で、だから入っても大丈夫、なんていうのだったら私は確実に溺れる。

「どなたでも大丈夫ですよ。魔術がかかっていますから」

水が丸くなっているのも魔術のおかげなんだろうか。疑問に思ったが、後で聞けばいいか、と腕を入れた。

指だけではわかりにくかったが、温かい。

冷たくも、ましてや熱くもなく、ぬるま湯のようだ。

そのまま進んで行くと、ふわりと体が浮かんた。私の身長よりも玉の方が大きいのだが、何となく膝を抱える。

肌にまとわりついていた服がなくなった。なぜだろう、と思ったが急激にまぶたが重くなり、私は意識を手放した。

02 『魔族』（前書き）

ルシファー視点です。

1話を改稿しました。

まだ読んでいない方はそちらを先に読むようにしてください。
申し訳ありません。

02 『魔族』

準備は整った。

さあ、始めよう。

召喚の儀式を――。

リアンデルと呼ばれるこの世界には、人間と魔族、二つの種族が存在する。

人間が住む国をサンハイド王国、魔族の住む国をムーンハイト王国といった。

ちなみに、この世界には魔物なるものも存在するが、魔族と魔物は別である。人型であるのが魔族、そうでないのが魔物と区別されるのが一般的だ。

魔族と魔物は相容れぬ別の種族であり、当然の事ながら敵対する事も多い。しかし、人間の多くは魔族と魔物は仲間であるとして、同じ討伐対象と定めた。……恐らくは、魔族が魔物を使役しもへしていたからであろう。だが、魔物は魔族の同類でもなければ僕しもへでもない。一部の知性ある魔物と契約を交わす事もあるが、人間でもできる。己の無知のせいで騒いでいる人間共は滑稽で愉快なものだ。

その魔族には、女がいなかった。昔はいたが何らかの原因でいなくなったのではなく、初めからいなかった。

では、魔族はどうやって生まれるのか。

人間達が常々抱いている疑問である。

魔族は人間から見れば恐怖の対象でしかないだろう。何せ、家畜だけでなく人間を食べる事もある。私としては、人間を食べるなど悪食とは思えないが。人間は知らぬ事だが、本来なら水はともかく食べ物に口にする必要がないのだ。ならば、わざわざ不味いものを食べたくはない。まあ、彼らなりに必死なのは理解できるが。

人間によく似た外見をしているにも関わらず、魔物以上にその生態系は全くと言っていいほど知られていない。もしくは間違っまちがて伝えられている。それが魔族だった。

魔族はよく言えば自由奔放な……悪く言えば自分勝手な協調性の

ない種族である。それは魔族である私が言っただから間違いない。共食いの可能性があるのだから当然と言えば当然なのかもしれないが。

実力主義な魔族は、生まれた時から力の大きさが決まっている。現在の特級魔族は私を含めて五人だけだ。上級は五十人、中級は二百人ほど。他は全て低級で、城へ足を踏み入れる事が許されていない者達だ。階級による権力の差を人間に当てはめると特級は公爵、上級は伯爵、中級は一般市民、低級は奴隷といったところか。

尤も、力の大きい事が素晴らしいとされる魔族において、奴隷という制度は存在しない。“力”は何も暴力だけではないのだ。自分で何でもできる魔族が尊敬される。ゆえに、奴隷に何かをさせるという事は力の弱い証拠だった。

魔族の数は人間よりも少ない。が、一人一人の強さは圧倒的に上のはずだ。一般市民は低級魔族にすら手も足も出ない。兵士でやつと低級を倒せるくらいで、騎士ならギリギリ中級。上級を倒せる者は、一人か二人しかいないだろう。普段サンハイド王国へ行く者は大抵低級であるため、位の高い魔族を倒す必要もないのかもしれない。

ゆえに、最近魔族討伐の動きが活発になっていると言うが、魔族が負ける事など万に一つもありえないと断言できる。自惚れなどではなく事実である。上級も倒せない人間が何人集まったって、私達特級魔族に傷一つつける事はできないのだ。

そうそう。魔族討伐の動きが活発になっているのは、低級魔族がサンハイド王国へ行く回数が増えているからだろ。魔王様が不在

であるため、魔族の統率ができていないのだ。元々他人に合わせるという事をしない種族である。魔王という絶対の存在がいなければ、一所に留まったりしなかったはずだ。魔族は魔王に絶対の忠誠を。魔王のみが魔族をまとめられるのである。

「ルシファー、準備できたぞ」

アスタロトが疲れの見える顔で言った。

召喚の術は魔術の得意な魔族でも、かなり難しい魔術だ。そもそも、私達だけの力では異世界から人を召喚する事などできない。この世界の神であるカルラ様にご助力願わなければならないのだ。

つまり、我々は召喚の術とカルラ様に助力を願う祈りを同時にしなければならない。アスタロトは今から夜通し行う儀式にげんやりしているのだろう。しかし、目は口ほどにものを言う、だ。

「魔法陣を描くだけで相当疲れたようですね。魔王に会うのは後になりますか？」

これも事実。アスタロトは一人で魔法陣を描いていたのだから。

魔法陣は魔力を注ぎながら描く必要があり、難しい術はそれだけでかなりの魔力を消耗する。特級魔族であるアスタロトでも最も難しく、失敗の許されない魔術の準備に並大抵ではない魔力と神経を使ったはずだ。

だが、ここで頷く奴は魔族ではない。

「冗談！ルシファー、お前わかってて言ってるだろ。魔王に会うのが楽しみでない奴がいるか？」

「ふっ……言うまでもない事ですね。もし嫌だと言うような下衆がおられたらこの手で直々に始末して差し上げましょう」

「ル、ルシファー？言葉が変になってるぞ？」

アスタロトの顔が若干青ざめている。私はにっこりと笑みを浮かべた。

「で、準備の方は当然完璧ですよね？」

「当たり前だ。不備があつたら陛下が安全に渡れないだろうが」

心外だ、という顔に、私は頷いた。

元々、アスタロトの魔王に対する忠誠は疑っていない。魔族は高位になればなるほど忠誠心が厚く、周りに合わせる事が上手くなる生き物だ。それは高位の魔族が共食いをする必要がないからであり、魔王と接する機会が増えるからである。

「魔王が召喚されるのは実に五百年ぶりですか……」

今から約五百年前、魔族の魔王に対する態度がかなり悪かったらしい。魔王に対する忠誠心はどの魔族でも持っているが、逆らおうと思えば逆らえないわけではない。それに怒ったカルラ様が、前魔

王が亡くなってからの五百年間全く力を貸して下さらなかったのだ。

しかし、三日前カルラ様が姿を現して下さった。曰く、

「いつまでも怒ってたってしょうがないしね。魔族が滅びたりしまらバランスが悪くなっちゃうし。下手したらリアンデールが滅びるかも」

……だそうだ。

魔族は寿命が長いと、今のところ人口も大して減っていない。が、このままでは確実に滅びてしまう。軽くおっしゃったが、かなり重要な事である。

何せ、魔族に女性は一人だけ。人間には知られていないが、魔王とは魔族の母でもあるのだ――。

「儀式に参加できないサマエルがかわいそうだな」

「仕方ありません。体調がまた悪化したようです」

ベッドの中の同胞を思い浮かべ、私は答えた。今生きている魔族は半数以上が言葉通り兄弟なのだが、私達の間には情なんてものはない。強者が絶対の世界だ。力が強いと階級こそ特級だが、体の弱いサマエルは私達から見れば弱者である。アスタロトの言葉に同情が含まれるのは、自分が同じ立場なら耐えられないからだろ。

それはともかくとして、これからが本番だ。カルラ様が協力してくださる以上、失敗すれば我らの責任。魔王を無事迎えるために、最善を尽くさなくては。

そう強く思いながら、私は“召喚の間”の扉を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3486q/>

異世界聖魔譚

2011年10月8日15時22分発行